



Desert Wind

■■ 『祝福された人生の秘訣』 ■■

LVJCC 牧師: 鶴田健次

イエス様は律法学者から、律法の中で一番大切な戒めは何ですかと尋ねられたとき、心を尽くして主なる神を愛すること、そして自分を愛するように隣人を愛することであるとされました。つまりクリスチャンというのは、神を愛し、人を愛する人でなければならないと言われたのです。

またローマ書12章では、「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろつてはいけません」(14節)、「悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい」(21節)とされています。言い換えるならば、クリスチャンは悪に対し、キリストの十字架の愛をもって勝利しなければならないということです。それでは祝福された人生の秘訣について考えてみます。

① 害する者を祝福する

祝福された人生の第一の秘訣は、迫害する者を祝福することです(ローマ12:14)。しかし、これは私たちの自然な姿に逆行します。私たちは迫害や悪を受けたなら、もっと大きな悪で復讐してやりたくなるような者です。そんな私たちが、どうすれば自分に悪意をもって来る人を赦し、祝福することができるでしょう。それは、神の愛を本当に知った者にしかできないことです。そして神は、クリスチャンがこの愛をもって生きることを願っておられるのです。

イエス様ご自身が十字架につけた人たちのことを、「父よ、彼らをお赦し下さい」と祈られたとき、その横にいた強盗が救われました。ステパノが迫害されて、石に打たれながら死んだ時も、「父よ、彼らを赦してください」という祈りを通して、パウロの心が動かされました。私たちは人を祝福すべきであって、呪ってはいけません。この御言葉に生きるとき、私たちが神様からの恵みをいただき、祝福された、勝利の人生を送ることができるのです。

② すべての人と平和を保つ

祝福された人生の二つ目の秘訣は、すべての人と平和を保つということです(ローマ12:18)。とは言え、私たちの側で悪意を捨てても、私たちのことを悪く思ったりする人はいるものです。そういう人に対して、私たちはどう対応したらいいのでしょうか。ローマ12:18に、「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい」とあります。つまり、たとえ人がどうであろうが、私たちは、すべての人と平和を保とうとする姿勢が必要だということです。

まさにダビデがそうでした。サウル王は、ねたみのゆえにダビデを殺そうとしましたが、ダビデはサウルに対し、彼を殺す機会があっても、自分から手を下すことはしませんでした。かえってダビデはサウルを祝福したのです。そういうダビデを神は祝福し、やがてイスラエル最大の王とし、メシヤを生み出す家系の一人に数えられたのです。そのように私たちも、自分に関する限り、すべての人と平和を保つことを心がけるなら、神は私たちを大いに祝福して下さいます。

③ 神の怒りに任せる

祝福された人生の三つ目の秘訣は、自分で復讐しないで神の怒りに任せるということです。自己中心の世の中であって、壊れた人間関係が一向に改善せず、相手が悪意をもって何かをする場合、私たちはどうしたらいいのでしょうか。ローマ12:19には、「自分で復讐してはいけぬ、神の怒りに任せなさい」とあります。もちろん私たちが不当な仕打ちを受けたりするときは、公の機関に訴えることもできます。しかし、それでも一番重要で中心的なことは、神様にお任せするという姿勢を持つことです。また自分を迫害する者を祝福し、その人のために祈るのです。そうすれば、神が最善を導いて下さいます。

人間的な考えによってではなく、イエス様が十字架で示してくださった愛の模範に従って、誰に対しても、悪に悪をもって報いることをせず、すべての人が良いと思うことをしていくのです。これが聖書が教える勝利の道、祝福の道です。

DREAMS COME TRUE

- ✦ 教会堂の建設
- ✦ 敬老ホームの設立
- ✦ 幼稚園の設立

お祈りのリクエスト

- 日本の家族の救い
- 各スモールグループのオikos伝道のために
- 入門者クラスのために 山口 兄、福留 兄、石原 兄姉
- 英語部の働きのために
- ユースミニストリー、サンデースクールのために
- 癒しの祈り: 恵理奈ちゃん、倉田一徳さんの脳腫瘍、神崎先生の目、植木ケン兄の糖尿病、新井雅之兄の癌、中村裕二先生の直腸癌、藤永君江姉の癌、Simeon 兄の癌、スカイ君の心臓、工藤忠行兄の癌

Desert Wind では、ご意見・質問等何でも受け付けております。
lvjccdw@hotmail.co.jp
発行: 鶴田健次
編集: 松岡みどり

「清く、正しく、美しく」

証し: Peggy Wilcox

私は神奈川県横浜市で生まれ、アメリカに来るまでずっと横浜で暮らしていました。私の両親は二人ともカトリックだったので、私も家の直ぐ前にあった大きな西洋館のカトリック・チャーチで、日本人の子供達5-6人とバイブルを読んだりジーザスのことを学んだりしていました。先生の名前はシスター・ワイド。日本語の上手な白人で、「イエス様はいつもあなたのそばにおられますよ。忘れないようにね」と言われたことを今でも覚えています。神さまはいつも、清く、正しく、美しく生きることを教えてくださいました。私はこの言葉が大好きです。この教会でカトリックの洗礼をしていただきました。

私の人生で苦難や難題はずいぶんたくさんありましたが、思い返せば、戦争は何んという人生の無駄な時期だったろうかと思えます。戦争が始まったのは小学校3年生でした。

小さい頃の自分を思い出してみると、私はちょっと変わった子供だったかも知れません。近所の友達と遊ぶより、自分で何かしている方が好きでした。小学校に入ってから、「婦人クラブ」という雑誌に服の型紙が付録でついていたのを知り、それを利用して自分の服を作ってみました。洋裁はけっこう気に入って、父はそれを見て、当時は日本に数台しかないミシンを私に買ってくれました。優しい父でしたが、私が小学校6年生のとき病気で亡くなりました。私は父の分も頑張ろうと思いました。

私が二十歳になる頃、街でアメリカ人女性に「ハロー」と声をかけたのがきっかけで、ミセス・アンダーソンとお友達になりました。ある日その方は私をアメリカ軍のオフィサーが集まるパーティーに連れて行ってくれました。そのパーティーで今は亡き主人と初めて会いました。しばらくして彼は交通事故に遭いアメリカに帰されてしまい、それから手紙での文通が始まりました。

オフィサーのパーティーがきっかけで、アメリカ女性のイブニングドレスを作る仕事を始めたのですが、口込みでどんどん注文が増え、2年後には店を出し、外注も含め縫い子さんが7-8人になっていました。そして生まれて初めて自分で家を建てたのもこの頃です。

オフィサーのパーティーで知り合った夫とは3年ほど文通して、夫は手紙でプロポーズをしてくれて、指輪も郵送でした。その後、夫は松葉杖をつけて日本に来て、私達は教会で結婚しました。夫は3ヶ月の滞在後アメリカに帰りましたが、そのあと

で私の妊娠が分かり、妊娠5ヶ月でアメリカに渡り、新婚生活をカリフォルニアで始めました。女の子が生まれました。生まれて間もなくジョージアに転勤になり、ジョージアで男の子が生まれました。15歳の年の差がある夫は長女が6歳頃米軍をリタイアして、私達家族はアナハイムへ引越しました。しかし夫はアナハイムに長く住むことはなく、病気で亡くなりました。

私はアナハイムにあるモールに自分の店を出し、注文服とオートレーションを始めましたが、当時女性がスポンサーもなく単独でオーナーになったことが珍しいと新聞のニュースになりました。そんな時代でした。店は繁盛して、お客様も店働きたいという人もたくさん来ました。その一方、家賃を払って店を出すより、家賃をもらう方になったらもっといいんじゃないかと、自分のショッピングモールを作ることを頭に描いていました。そして実現する時が来たので、良い土地を買い建物を建てました。私のモールもとても繁盛していました。

長女が大学に入る頃、私が45歳ごろ、あるパーティーで知りあった人と意気投合し、一緒にビジネスを始めようなどと話が盛り上がり、ついには再婚ということになりました。幸せな結婚生活でしたが、以前彼は消防士の仕事で毒ガスを吸ってしまったことが原因で、結婚して8年後に亡くなってしまいました。心が通い合う友達のような夫婦でした。

私は今から約15年程前にラスベガスへ引越して来ましたが、それは老後をどこか環境のいいところでゴルフをしながら過ごしたいものだと思い探していたところ、庭の続きがゴルフ場のような家が気に入り、ここの家を購入しました。また、ラスベガスで友達になった人が日本人のガーディナーを紹介してくれて、松岡幸夫さんとお会いしました。

松岡さんは「日本人教会に来ませんか?」と誘ってくれました。教会からもしばらく遠ざかっていたので早速行くことにしました。教会の人達は皆さんフレンドリーで、そのうちスモールグループの聖書勉強に参加するようになりした。聖書を学ぶにつれて、今まで自分の力でやってきたと思っていたのが、実は自分の力ではなく全ては神様がご計画をもって私を導いておられたことを知りました。そして、自分の罪をはっきり知らされ、イエス様を私の救い主、また主として信じることができ、この教会で改めて洗礼の恵みに預かることができました。それ以降、私の心には神様が住んで下さり、いつでも神様が共にいてくださることを感じるのです。ハレルヤ!



編集室・気まま便り

クリスチャンではない友人が亡くなった。誠実に生き、優しく几帳面で義理堅い人だったので、信用があった。しかし自分の生きる姿勢を崩さず守り、それが正しいとも思っていた。ある日、私の信じていることを薦めてみた。彼は自分の陣地を侵略する者は許さないと断固とした反論を返してきた。取り付く島もなかった。この病気になる、医者に「良くてあと2年」と言われたそうだ。入院中、果物と一緒に三浦綾子の本を差し上げた。読んでみると約束してくれた。その時が主の時と思って、救いと祈りの力について短く話した。病気のせいか素直な反応で「さうだね」などと返事したが、真意はどうか... 退院して自宅療養中に、肉体が減んでも魂が救われることが最も重要だというメールを出した。読んでくれていればいいが... それから彼は物が食べられなくなりどんどんやせ衰えた。私は信じた。彼は唯一の希望の光をつかんだと。